

聖書：ヤコブ 1：26～2：7

説教題：えこひいき

日時：2017年8月13日（朝拝）

ヤコブは迫害によって散らされ、試練の中にあつたクリスチャンたちに、この手紙を書いています。彼は読者たちに、試練は神が良い意図をもって与えているものだと述べました。その中で忍耐を学び、やがて何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となるという救いのゴールに達するためにと。その御心をわきまえて、彼らはどう取り組めば良いのでしょうか。ヤコブは 21 節であなたがたを最後の救いまで導いてくれるのは御言葉だと述べました。頼るべきは人間の知恵や方法ではない。試練を与え、一切を導いている神は、試練をくぐり抜けるための手段もきちんと私たちに備えてくださっている。それは神の御言葉である。その御言葉を受け入れて歩む際に大事なことは、これをただ聞くだけでなく、これを行なうことであるとヤコブは述べました。これこそ、この書の特徴的なメッセージです。私たちの信仰は行ないに現れ出る信仰でなければならないのです。

前回は 1 章 25 節までを見て、1 章最後の 26 節と 27 節は残しました。この二つの節には真の宗教とはどのようなものであるかが述べられています。ヤコブはここで真の宗教の定義を語ろうとしているわけではありません。彼が言いたいことは、真の信仰には以下に述べる特徴も見られなければならないということです。ここには三つのことが述べられています。そして実はこの 3 つがこの後、この手紙の中で詳しく語られる内容になっています。

一つ目は舌の問題です。26 節に「自分は宗教に熱心であると思っても」とあります。人は宗教的儀式を勤勉に守ることによって、自分はその宗教に熱心であると思しやすいものです。私たちも毎週の礼拝に参加している、日々お祈りもしている、聖書を開いてみことばを読んでいる、献金をささげ、讃美歌も愛唱している、聖餐式にも定期的にあずかっている。こういったことで自分は宗教に熱心だとの自負を持ちやすい。しかしヤコブは問うのです。もしそのように思っている、果たして自分の舌にくつわをかけているだろうか。くつわとは馬を御するために使う道具で、これがないと馬は勝手に走り、抑えることができなくなります。しかしこれをつけているなら、乗り手は馬をきちんとコントロールできます。そのように自分の舌を正しく制御できているだろうか？前

回見た 19 節です。「聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそく」と言われました。もしこのような歩みをしていないのに、自分は宗教的な人間だと思っている人は、自分をだましているとヤコブは言います。そのような人の宗教はむなしいと。後にこの舌の問題は 3 章で扱われます。そこでは舌という小さな器官が破壊的な働きをすることが言われます。これはあまりしゃべらない人間になれ！ということではありません。ヤコブが述べていることは無口な人間になることではなく、正しくコントロールされた言葉を語る者となることです。

2 つ目はあわれみの働きです。27 節に「父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤児や、やもめたちが困っている時に世話をすること」とあります。私たちはただ神の言葉を聞き、神を礼拝し、神を賛美していればいいものではありません。神を礼拝している者として、神と同じ心で、これらの人々に心を用いる者でなくてはならない。ここで孤児ややもめが取り上げられているのは、これらの人々が旧約聖書以来、困っている人たちの代表として語られてきたからです。ですから彼らに限らず、あらゆる困っている人々、弱い立場にある人々に心を留めて関わるのが求められます。このテーマに関することは、この後 2 章から語られて行きます。

そして三つ目は 27 節後半にありますように「この世から自分をきよく守ること」です。「この世」とは聖書では神を受け入れず、むしろ神に敵対し、反逆するこの世界のあり方全体を指す言葉です。私たちはそういったこの世の考え方、また生活習慣に囲まれながら生きています。そういう中で、この世と調子を合わせず、聖なる神にならってきよい歩みをする。このことについては 3 章 13 節以降で語られます。以上のような具体的なライフスタイルに私たちの信仰は現われ出なければならない。私たちは自分を欺くことなく、ヤコブが語る言葉に照らして、自分の信仰のあり方を確認・吟味することが求められています。

さてそうして 2 章でまず取り上げられているのは「えこひいき」の問題です。「えこひいき」という言葉は、ギリシャ語では「顔」という言葉と「受け取る」という言葉が組み合わせられた言葉です。すなわち「顔」に象徴されるその人の表面を見て、あるいは外側を見て、それによってその人を判断すること。そこからさらに身体的外見や社会的地位、また経済的に豊かな人か、貧しい人かを見て分け隔てをすることです。その「えこひいき」の具体的な例が 2 節以降に記されています。会堂に二人の人が入って来たとして

とヤコブは言います。一人は金の指輪をはめ、立派な服装をした人。経済的に豊かで、社会的にも上流階級に属する人です。一目見ただけで良い生活をしている人だと分かります。もう一人はみすぼらしい服装をした貧しい人。生活レベルは決して高くない。むしろ困難の中で毎日を過ごしているのだらうと想像されるような人です。その場合、あなたはどうするのか。3節：「あなたがたが、りっぱな服装をした人に目を留めて、『あなたは、こちらの良い席におすわりなさい』と言い、貧しい人には、『あなたは、そこで立っていなさい。でなければ、私の足もとにすわりなさい』と言うとすれば」。彼はここで「もし〜だとすれば」という言い方をしていますように、これは一つのケースを仮定して話したものです。ですから分かりやすいように幾分誇張した表現にもなっているのでしょう。しかし6節に「それなのに、あなたがたは貧しい人を軽蔑したのです」という言葉があることからすると、ある程度このようなことは実際に彼らの間に見られたことだったようです。いやこのようなことは今日の私たちの間にも起こり得ること、あるいは起こっていることでもあるのではないのでしょうか。

なぜこのようなことが起こるのでしょうか。それは改めて説明しなくても私たちには分かると思います。経済的に豊かな人、また見た目に素敵な人、あるいは社会的地位がある人だと知ると、私たちはその人の知り合いになりたいと思います。そうすれば何かと得することが自分に起こるかもしれない。またできればその人の栄光にあやかりたい。こうした特別のまなざしを持ってその人を見つめ、高く評価し、関わりを持とうとします。しかし反対の貧しい人とは関わろうと思わない。その人と友だちになってもあまり良いことはない。かえってその人との付き合いの中で時間やエネルギー、経済的な犠牲を強いられるかもしれない。面倒なことになりかねない。そう考えて関わりを避けるのです。この手紙の読者たちには特にこの誘惑は強かったと考えられます。彼ら自身、迫害によって自分の住んでいた町を追われ、これまでと違う地域にやって来て、経済的・社会的な圧迫の下にありました。そんな中、何とかこの地で生き延びるために、この土地の有力者と仲良くなり、彼らとのつながりを持ちたい。一方でそうでない貧しい人たちは関わりを持つ価値がない人たちと見下し、冷たい扱いさえた。しかしヤコブはこのようなえこひいきは、あなたがたが持っている信仰と一致しないと言います。どういう点から正しくないのか、ヤコブはここで三つのことを語っています。

まず一つ目は2章1節にある通り、「あなたがたは私たちの栄光の主イエス・キリストを信じる信仰を持っているのですから」ということです。ヤコブはここでただイエ

ス・キリストを信じる信仰と言わず、「栄光の主イエス・キリスト」と言いました。これは私たちはどの栄光に心を向けるのかという問いかけをするためであったと考えられます。彼らはともすると、この世の栄光、この世の栄華に心を奪われがちでした。ですから金持ちを重視し、貧しい者たちを軽視しました。しかし真の栄光はイエス・キリストが持っている栄光です。この方の前ではこの世の栄光は栄光とは言えません。パウロがピリピ書の中で、キリストの光の前ではすべてがかりあくただと語った通りです。それらはやがて消え行くものであり、はかないものであり、一時的なもの、したがってゴミのようなものでしかない。そういうむなしい栄光ではなく、イエス・キリストの栄光を知っている者たちとして、私たちは何に価値を置いて考えるのかということです。やがて主イエス・キリストは栄光の輝きの内に現れて、すべてをおさばきになります。その栄光の主を見つめるところから、私たちの歩みは導かれなくてはならない。やがては消え去る偽りの栄光を熱心に追い求める愚かな歩みをしないように！ということでしょう。

そして今日の箇所で中心的な部分は、二つ目となる 5 節の内容です。「よく聞きなさい。愛する兄弟たち。」 こう呼び掛けて、ヤコブは神はこの世の貧しい人たちを選んで、信仰に富む者としたということを述べます。すなわち良く見つめるべきは神のお姿です。神は旧約時代から、貧しい者を配慮し、顧みて下さるご自身であることを示して来られました。詩篇 69 篇 33 節：「主は、貧しい者に耳を傾け、その捕われ人らをさげすみなさらないのだから」。イザヤ書 61 章は「神である主の霊が、わたしの上にある」と始まり、主がわたしに油を注ぎ、遣わされたのは、「貧しい者に良い知らせを伝えるため」とあります。これはもちろん金持ちたちを神は退けているということではありません。もしそうだったら、神は別の意味でえこひいきしていることになります。聖書の中には、神の民とされた者たちの中に裕福な人たちも沢山います。アブラハム、ヨブ、アリマタヤのヨセフ、ルデヤなどもそうです。しかし神はそういう富んでいる人たちに特別な目を注いで、貧しい人のことは軽く扱うというこの世が見せるような態度は取られない。むしろご自身が「恵みの神」であることを、貧しい人たちに格別な配慮を向けることによって示されて来られました。そして聖書におけるこの「貧しい」という言葉は経済的な意味だけではなく、霊的な意味も掛け合わせて持っています。本当は経済的に貧しいことよりも、霊的な意味で貧しいこと、神の前に何ら良しと認められるところを持っていない者であることの方がはるかに重大な問題です。しかし神はそんな私たちをあわれんで救いに導き入れてくださいました。信仰において非常にリッチな者、天の

御国を相続する者としてくださいました。であるなら、もし私たちが貧しい人たちを低く評価し、その関心から切り捨てる生き方をするなら、この神と逆行する生き方をしていることになります。神を信じると言いながら、その神と反対の生き方をしている。これは大いなる矛盾です。

そして三つ目に 6~7 節で、貧しい人を軽んじることの反対として、富んでいる人を賞賛し、彼らに取り入ることは何を意味しているかとヤコブは問います。まず「あなたがたをしいたげるのは、富んだ人たちではありませんか」と言います。いつの時代でもそうかもしれませんが、当時も富んでいる人たちはどんどん富を蓄積する一方、多くの人々が土地を手放さざるを得ない状況がありました。沢山持っているのだからもういいのではないかと思うのですが、富んでいる人たちは貧しい人たちを食い物にしてでも、その持つ富を膨らませようとしていました。

そのための実際的方法が二つ目の「あなたがたを裁判所に引いて行くのも彼らではありませんか」ということでしょうか。富んでいる人たちは社会的にも力があり、裁判においても自分たちに有利な判決へ持って行くための様々な手段を持っていました。弱い立場にある人を追い詰めて、その土地を手放させるべく、抵当権を取る。あるいはサラ金のごとく、困っている人にお金を貸して結局は暴利をむさぼる。金持ちたちはそのように自分の利益を獲得するために、好んで人々を裁判所に、首に縄をつけてでも引っ張って行くのです。

そしてこのような彼らの姿は宗教的偏見とも絡んでいたことが7節に示されています。「あなたがたがその名で呼ばれている尊い御名を汚すのも彼らではありませんか。」ここでの金持ちが異邦人だったら、彼らはユダヤ人への嫌悪感からそうしたのかもしれませんが。あるいはこの金持ちがユダヤ人なら、イエス・キリストを認めない迫害するユダヤ人としてそうしたのかもしれませんが。いずれにせよ、このような金持ちたちに与し、彼らに媚びを売ることは何を意味するのでしょうか。それは神に敵対し、神の御名を冒瀆する人たちの列に一緒に加わることです。直接的に主の御名を冒瀆しなくても、そうする人たちをえこひいきし、高く賞賛することによって、実質的にそのことをしていることになるのです。

私たちの、富んでいる人、また貧しい人に対する態度はどうでしょうか。私たちも人

をえこひいきしていることはないでしょうか。外面的なことで人を差別し、神と逆行する生き方をしていることはないでしょうか。私たちはただ恵みによって救っていただいた者たちです。御前に富んでいた者では決してなく、むしろ反対に貧しく、何のとりえもなく、捨て去られて当然の者たちだったのに、一方的なあわれみによって救いの恵みへ入れて頂いた者たちです。神は私たちをそのようにして救ってくださったばかりでなく、私たちも他の人に対してそのようにあるようにと命じておられます。最後に申命記 10 章 17～19 節をお読みします。「あなたがたの神、主は、神の神、主の主、偉大で、力あり、恐ろしい神。かたよって愛することなく、わいろを取らず、みなしごや、やもめのためにさばきを行ない、在留異国人を愛してこれに食物と着物を与えられる。あなたがたは在留異国人を愛しなさい。あなたがたもエジプトの国で在留異国人であったからである。」ここに神はかたよって愛することがないこと、すなわちえこひいきがないこと、また貧しい者を顧みてあわれみを垂れてくださる方であることが述べられています。そしてあなたがたもそのようであるように！と述べられています。それは「あなたがたもエジプトの国で在留異国人であったからである」と。イスラエルは貧しい人やあわれむべき人を見て、自分とは関係のない人のように思うべきではないのです。自分たち自身もかつてエジプトで在留異国人であったこと、そこから救い出された者たちであることを覚えていなければならないのです。同じように私たちも自分はどんな哀れな状態から救い出された者であるのか、忘れて高ぶってはならないのです。そして神が私にしてくださったように、そのように他の人にすることに、私たちの感謝を現して行かなければならない。神は私たちがご自身を映し出す歩みをする者となることを求めておられます。私たちは今一度、自分は何を求めているのか、どんな栄光を求めているのか、今日の御言葉の光の下で点検したいと思います。そして神のお姿をもう一度見上げて感謝し、どんな人をもえこひいきすることなく接する者へ、そして神の恵みを共に喜ぶ者へ、またその歩みをもって神の栄光こそを宣べ伝える歩みへ進みたいと思います。